
ヨー!!ギ、ラス!!

轟

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ヨー！！ギ、ラス！！

【Nコード】

N7493J

【作者名】

轟

【あらすじ】

みんなの話し合いと言う、たんなる暇つぶしから始まったこの物語！

読んで下さい！

さあ！ショー・タイムだ！！！
と思ったのだけど本編（ケンの物語）に関わる要素が混じってしまった。……すみません。

はじまり

ミニリュウとヨーギラスの話が始まるよ。

では、どうぞ。

「ん〜。」

「ココハドコダ？」

「大丈夫？ ヨーギラス？」

「えっ、あ、ああ。にしても、ここはどこだ？」

ここに降り立ち2人のポケモン。ヨーギラスとミニリュウ。そしてここは森の中。

「森みたいだね〜♪」

当たり前の事を不思議そうに言うミニリュウ。しかしその発言は間違いでは無い。

何故ならこの2人は作者のご褒美によって連れて来られたのだから。

「さて…。どうしよっか？」

「とりあえず…。歩くか。情報も得ないといけないしな。」

2人が森の中をあるこうとすると…。こちらに向かって飛んでくるポケモンが見えた。そのポケモンは、バタフリーだ。

「た、助けて下さい！私の子が……！この前の地震で出来た割れ目に……落ちてしまったんです……！」

「困ってるのか？」

「はい……！」

「あんないして……♪」

「分かりました……！」

ヨーギラスはミニリュウと共にバタフリーについて行った。

（作者の面倒事から解放されたと思ったら……。また面倒事か……。まあ、困ってるしな。）

まずはお知らせ（前書き）

た、大変だ…。

ヨーギラス

「どうした？」

ケンの方のストーリーが全く書けない。

ミニリュウ

「へ〜♪」

な、何で嬉しそうなんだ？

ミニリュウ

「その分こっち書けるから〜♪」

う…。まあ、そうなりますが…。と、とりあえず頑張ります！

ヨーギラス

「2話が始まるぜ。」

やる気が感じられん。

まずはお知らせ

「ここ何です…。」

バタフリーがヨーギラスに穴の位置を伝える。暗くて奥が見えないので、無闇に飛び降りる事は出来ない。

「ここ（地面）の下に何か在るのか？」

「この先には森が在って、一番深い所から入れる洞窟だと思いますが…。」

「そうか…。ミニリュウ行くぞ！」

「了解〜♪」

ヨーギラスはミニリュウを引き連れて森の奥に歩き出した。

「あ、あの！本当に助けに行ってくれるのですか！？」

「もち。人助けはしなきゃあな…。あの事が…。いや、何でも無い。とにかく行くぞ！」

「は〜い〜♪」

「じゃあこれを“穴抜けの珠”です！これを使えばこの近くに戻って来れます！」

そう言いながらバタフリーはヨーギラスに碧色の珠を投げた。ヨー

ギラスはそれを受け取り、

「サンキュー!!」

と言って歩き出した。

(何かワクワクするな……。とりあえず……。急ぐか……。)

そう考えヨーギラスは歩くスピードを上げた。

まずはお知らせ（後書き）

ヨーギラス

「この話って…。」

君の予想通りにポケダンです。しかも救助隊と言う方のを。

ヨーギラス

「何で救助隊を？探検隊の方が人気なのに…。」

まあまあ。始まり方が始まり方たら…。あの始まり方は探検隊には合わないでしょう。

ヨーギラス

「まあ…な…。」

と、言うわけで次話をお楽しみに！

森へ（前書き）

あああああ！
か、書けない！
上手く書けない！
どうしよう！

ヨーギラス
「うるせー。」

ミニリユウ
「うるせー。」

見捨てないでくれえ！

ヨーギラス
「行こうぜ。」

ミニリユウ
「うん♪」

森へ

ヨーギラスとミニリュウは森の中を走っていた。只、ひたすらに森の奥を目指して。

「ヨーギラス〜。」

「は〜い。」

「角〜頭。」

「は〜い…。じゃねえ!! 誰が角頭だ!!」

森の中で大声を出しながら走っていた。そんな大声を聞きつけてポケモンが集まり始めていた。

(ん…? 誰かが見てるな…。はあ…。敵だろうか?)

そう思ったヨーギラスは、

「ミニリュウー。敵がいる…?」

とミニリュウに知らせた。

「なんで聞くの?」

「あ! えっ…。じゃあ。敵みたいなのがいる。」

「ふ〜ん…。どうでもいいか…。」

「どうでもいいのかよ!?!」

と漫才のような会話をしつつ、走り続けた。その後をある2人のポケモンが追った。

「待ちな!?!」

突如2人の前に2人のポケモンが現れた。片方がケムツソでもう片方がポッポだ。

(あゝ。めんどいなゝ。素通りするか…。)

ヨーギラスは面倒事をこなすのが面倒なんで、素通りする事にしたのであゝる。

(なゝれゝたゝ。喋り方がおかしいぞ。ちゃんと喋れ。)

なゝれゝたじゃねえ!! 語り手だ!!

(変わんなくね?)

と、まあ、そのままケムツソの隣を歩いて行った。

「俺様を無視するなあ!?!」

シカトされた事に怒ったケムツソがヨーギラスに向かって攻撃して来た。

「あゝ♪ケムツソゝやられたなゝ♪」

そうミニリュウが楽しそうに言った。

その直後。ケムツソの体が宙をまった。そして地に向かって落ちて来たケムツソをヨーギラスが蹴り飛ばした。ケムツソは木に叩きつけられ気絶した。

「次はお前か…。」

ヨーギラスはポップポの方を向いてそう呟いた。

ポップポが構えるが突如後ろから攻撃された。ミニリュウでは無い。ヨーギラスだ。ポップポの後ろにポップポが気づく前に回り込み、攻撃したのだ。

「は、速え…。何でヨーギラスがこんなに…速いんだ？」

「特訓。」

そう言い放ち、ヨーギラスは歩き出した。その後をミニリュウは笑いながら追った。

（そゝ言えばあたし、出番無かったな…（怒）。）

森へ（後書き）

ミニリユウ

「あたしの出番は？」

えっ、あ！わ…。

ミニリユウ

「わ？」

忘れてました（笑）

ミニリユウ

「笑いながら言う？」

気楽に行こう！

ミニリユウ

「無理！今度はあたしの出番出してよね。」

わかりやした…。

喧嘩上等!! (前書き)

ヨーギラス

「物騒なタイトルだ…。」

まあ喧嘩が始まる訳じゃあ無いんだけどね。

ヨーギラス

「ふん。詐欺だな。このタイトル。」

ひどっ!!

喧嘩上等!!

ヨーギラス達は順調に敵を倒して奥に進んでいた。

「何でこんなに敵が出るんだろうな？」

「わかんないよ？ 角頭はどう思う？」

「つ・の・あ・た・ま・じゃねえ!! まあ、俺もわかんねえけどさ
…。」

「角頭やだ？ だったら、あの名前で呼ぶ？」

ヨーギラスの耳がぴくりと動く。

「止めろ。あの名は…。」

「わかったよ♪ あ！ 洞窟だよ♪」

ミニリュウが洞窟を見つけた。その洞窟の入口はこの土地のポケモンに合う大きさだった。つまり、ヨーギラスやミニリュウが入るにはちょうどいい大きさだ。

「ここから俺らが歩いて来た道をまた戻るのか。」

「深さが違うよ。」

「あんな…（呆）。もういいや…。」

ミニリュウに呆れの表情を見せ、洞窟に向かって歩き出した。それを見たミニリュウは少し笑いヨーギラスの後を追った。

「ふう…。」

「暗いね♪」

「そんな事言ってる場合じゃないようだぜ…。」

ヨーギラスが後ろを振り向いた。ミニリュウも後ろを振り向いた。そこには6人のヒマナツツが居た。

「どうやら団体さんのお出ましのようだぜ…。」

「オメェら!! 俺らの縄張りに入って無料^{ただ}で帰れると思うなよ!!」

（見た目と違って凶暴だな…。チンピラか？）

またヨーギラスが呆れの表情を見せる。その表情はヒマナツツ達に喧嘩を売る事になる。

「ああん!?! 何だその表情は? 俺達を嘗めてんのか!?! ゴラァ!!」

「悪いな。勝手に入って来て…。まあ、只単に運が悪かったんだよ。お前らは。」

「な、何だと…!! ふざけてるんじゃないぞ!! タコが!!」

「やるか。ミニリュウ。」

「わかったよ。」

（喧嘩か…。なつかしいな。）

喧嘩上等!! (後書き)

ヨーギラス

「それにしてもあの名か……。懐かしいな。」

ミニリュウ

「そうだね。ヨーギラスが作者ワールドに行く前の話だもんね。」

」

ヨーギラス

「若かったな。あの頃は……。」

ミニリュウ

「じじ臭い。」

ヨーギラス

「失礼な!! 俺はまだ若いぞ!!。」

ミニリュウ

「心がじじ臭いの!!。」

ヨーギラス

「心も若いわ!!。」

さあ…かかって来い!! (前書き)

ヨーギラス

「ケン書いた後に良く俺達の話を書いたな…。」

つ、疲れたけどね…。すみません疲労の余り、後書き書く気力が湧きません…。

ヨーギラス

「ほう…。なろう入ってから初めてだな。後書き書かなかったのは…。」

まあ…そんな時もあるさ…。それでは、

さあ…かかって来い!!

ヨーギラスに向かって2人のヒマナッツが突っ込んで来た。

「ミニリュウ。こっちの2人は俺がやっつく。残りは頼んだ!」

「りーかい。」

ミニリュウはヨーギラスの行動に何の躊躇いもなく了解した。

ヨーギラスは突っ込んで来た内の1人のヒマナッツの頭の芽を掴んだ。

「く…!! 離せ!! クソガキ!!」

ヒマナッツは体を振り回して暴れるがヨーギラスは表情を変えずに掴み続けた。

「“吸い取る”!!」

そのヒマナッツを助けようともう1人のヒマナッツが攻撃して来た。ヨーギラスはヒマナッツを離さず、“吸い取る”を避けた。そして掴んでいるヒマナッツを技を放ったヒマナッツに向かって投げつけた。

「ぐあああ!!」

苦痛でヒマナッツは悲鳴をあげる。構わずヨーギラスは歩き、地面に倒れているヒマナッツを足で踏みつけた。

「ぐうう…!!!!」

2人のヒマナツツが苦痛で同時に声を出す。

「もう一度言うぞ。運が悪かったんだよ。お前らは。“火炎放射”
…。」

ヨーギラスは踏みつけているヒマナツツに向かって火炎放射で攻撃した。

もうヒマナツツには声をあげる力も残されていなかった。

ヨーギラスはヒマナツツに戦う力が残っていないと判断し歩き始めた。

「待てえ…。」

「何だ？まだ戦うのか？」

「違う……。尋ねたい事があってな……。」

「尋ねたい事？」

「そうだ……。何故お前は“火炎放射”が使えた？ヨーギラスは習得出来ない筈だ……。」

「そんな事か……。俺の体に秘密があんだよ。それだけか？尋ねたい事は？」

「そうか……。それだけだ……。」

その言葉を聞くとヨーギラスは再度歩き始めた。

ミニリュウは……。

「“吸い取る”！！」

4人もいるヒマナッツの攻撃を軽々と避けていた。

「ちゃんと戦ってよく（怒）。」

相手の攻撃を簡単に避けれるせいか、ミニリュウは退屈そうだ。

「馬鹿にするなあ！！ “メガドレイン”！！」

ミニリュウに馬鹿にされ怒ったヒマナッツ達が四方から“メガドレイン”を放った。

「ほっ♪」

ミニリュウは戸惑い事無く全ての“メガドレイン”を避けた。

「もういいや……。 “巻きつく”！！」

ミニリュウは退屈なのでその体の長さを活かした“巻きつく”で4人全てのヒマナッツに巻きついた。

ミニリュウはそのままヒマナッツ全員を洞窟の壁に叩きつけた。それを何度も繰り返す。

「ぐう……。」

ヒマナッツ全員は痛みで気絶した。それを見たミニリュウはこの程度か……。と思いヨーギラスの方に向かって歩き始めた。

道（前書き）

道…。

道…。

み、

ヨーギラス

「道々うるせー！！」

君…。この小説を書くためにある事をしたんだぞ…。

ヨーギラス

「な、何をしたんだ？」

ポケダンの青の救助隊のデータを消したんだ！！

ヨーギラス

「何だ…。そんな事か…。」

あ、あのデータには賢さMAXまで上げた主人公が居たんだ！！

まあ、ポケダンは2回か、3回くらい最初からにしてるけどね…。

それでは…どうぞ！！

道

ヒマナッツを倒したヨーギラスはミニリュウと合流し、洞窟の奥地を目指していた。

「……。はぁ……。見えたぞ。」

「えっ！？何が？」

「光だ。地上からの…。つまり……。目的地に到着だ。後は、バタフリーの子を救出するだけか……。」

そうミニリュウに言い、ヨーギラスは進む。光のほぼ真下に緑色のポケモンがうずくまっていた。恐らくあのポケモンがバタフリーの子供なのだろう。

ヨーギラスは普通に歩いて近づく。

「待ちな！！！」

突如、そうヨーギラスに向けて言葉が放たれる。ヨーギラスが半ば呆れ顔で振り向いた。するとそこには…、

「へえ……。ちったあ強そうな奴だな。それはそうと俺に何のようだ？」

ナッシーが居た。恐らく、この森に住むタマタマが進化したのだろう。

「お前も縄張りに入るのか？入ったら監禁して拷問してやる。今引

き返せば許してやる。」

ヨーギラスは視線を緑色のポケモンに移し、歩き出した。歩きながら、ヨーギラスは尋ねた。

「あのポケモンはあんたの言う“拷問”ってやつにあってるのか？」

「そ、そうだが。」

「ロリコンかお前は？それともドが付く程のサドか？こんな小さな子供を虐めるなんてさ……。大人気ない……。何かムカついたからお前を倒す（怒）。」

そう言うときヨーギラスは歩みを止め、ナツシーの方を再び向いた。

「出て来い！！」

ナツシーがいきなり叫んだ。すると、どこに隠れていたのかわからないが、ナツシーが3人現れた。

「ヨーギラス♪あたしこっちのおじさん倒すから、そっちのおじさん2人を倒しておいてね♪」

ミニリュウは状況が読めないタイプなのか相手を挑発するような発言をする。

「分かった。まあ、一瞬で終わるけどな……。」

ヒュッ…。

ミニリュウの方向から2人のナツシーが飛んできた。その2人はヨーギラスの前に居る2人にぶつかる。ぶつかった時の衝撃が強かったのか4人のナツシーは気絶した。

「よ、弱っち〜。」

あまりのあっけなさにヨーギラスも呆れの言葉しか出なかった。2人はバタフリーの子供の元へ走って向かった。見たところ外部に大きな損傷は無かった。

「助けに来たよ〜。」

ミニリュウがそう言うとそのポケモンの顔色が見る見るうちに良くなった。

「お母さんも待ってるみたいだし〜。帰ろっか〜?」

「うん!!」

そう力強く頷いたのを見ると、ヨーギラスはバタフリーに戻った穴抜けの珠を取り出した。そしてその珠を使い洞窟から脱出した。

「この子も無事で……。もう何とお礼を申したらよいか……。」

「いいよ。いいよ。お礼は〜♪無事に助かったんだ〜♪それだけで充分♪」

「せめて、お名前を……。」

「あたしはミニリュウ。こっちが角頭だよ〜。」

誰が角頭だ。とヨーギラスは頭でそう思っていたが、人前なので言うのは止めた。

「か、カツコイイ……。」

バタフリーの子供。いや、キャタピーがそう呟いた。

（凄い…憧れの目でこっちを見てるな……。あんなに見つめられと…、何か照れるな……。）

そう思っていたヨーギラスの頬は少し赤かった。

（まあ……。こういうのも悪く無いか……。作者が俺らをこの世界に連れて来たのは、困っているポケモンを助ける為なのか？）

そんなヨーギラスは少し頭が痛くなるような気がするのですでした。

「これはほんの少しですが……、お礼です。受け取って下さい。」

そう言うミニリュウに“オレンの実”と“モモンの実”と“チーゴの実”を渡した。それをミニリュウは嬉しそうに受け取った。

「あなた達は救助隊の方向ですか？」

「いや……。救助隊じゃない。」

「そうですか……。私が言うのも難ですが…、だったら救助隊になってみたら如何でしょうか？救助隊にはここから直ぐの町の“ペリッパ―連絡所”でなる為の手续が出来ますよ。それでは、」

そうヨーギラス達に説明するとバタフリー達は行ってしまった。

（これは……、ポケ助けをしろって事なのか？）

ヨーギラスがそう思っている最中、ミニリュウは歩き出していた。

「ヨーギラス♪とりあえず町に行こうよ♪」

（そうだな……。今、グチグチ悩んでいても何も変わらないな……。
）

ヨーギラスはミニリュウの後を追った。色々な思いを抱きながら。

道（後書き）

ポケダンの豆知識。

青の救助隊、赤の救助隊。

ダンジョン内のお店で泥棒した時に出て来るカクレオンのレベルが異常に高い。

確か…、設定上レベル90とか、それに対して貰える経験値は基本的には9。

酷くないですか…？

さらに2倍速。オマケに無限に出て来る。これが泥棒したものに対する罰なのだろうか…。

スタート!! (前書き)

ヨーギラス

「なあ……。今更なんだが……。この小説のタイトル……。何だこれ？　ヨー!!! ギ、ラス!!! って何だ？」

ああ。あれかてとーに考えた。

ヨーギラス

「お前……。酷いな……。もういいや……。」

あ、帰って行った。

それでは、どうぞ!!

スタート!!

ヨーギラス達は町を目指して歩いていった。

森をひたすら歩き、突如、目の前から森が無くなった。そう森を抜けたのだ。

そしてそこには町の建物が並ぶ景色が広がっていた。その景色を見たヨーギラスとミニリュウは固まった。

「う、嘘だろ……?」

ヨーギラスの口から零れた言葉。それはその景色を否定する言葉だった。

「作者!! 何故俺らをここに連れて来た!？」

ヨーギラスが怒鳴る。

その訳を教えよう。この世界はヨーギラス達が“僕らの話し合い”に登場させる前にいた世界だ。この世界にはヨーギラスとミニリュウの嫌な過去がある。

怒鳴るヨーギラス君に1つ言っておこう。この世界は君が居た頃から120年後の世界。

「だからって……。」

大丈夫。今から22年前にあの組織は壊滅した。まあ、今はGLAYは居ない。とりあえず救助隊になるかを考えたら? 生活は君ら2

人で頑張ってこなしてね。じゃあ。

「分かったよ……。とりあえずミニリュウ。ペリッパ―連絡所を探そうぜ。」

ミニリュウは静かにコクリと頷き、歩き出したヨーギラスの後を追った。

では、何故ヨーギラスが120年経っていたにも関わらずこの町を見抜けたをお教えしよう。この町の入り口には“聖結晶の石盤”と言われる板に17の穴が空いた石盤があるのだ。これは120年前から存在するものだった。ヨーギラスはそれを覚えていたのだろう。

話を戻して、町のポケモンなどに話を聞き、2人はペリッパ―連絡所を探した。

町から少し離れた岬の先にその建物はあった。外見はペリッパ―を模した形となっており、建物のペリッパ―の口に当たる部分からペリッパ―が飛び立っていたりしていた。この建物は120年前には存在しない建物だ。

「と、とりあえず中に入るか……。」

ヨーギラス達は中に入って行き、受付のペリッパ―に話しかけ、救助隊になる事を伝えた。

「ここにチーム名と初期メンバー名をお書き下さい。」

ペリッパ―から用紙とペンが渡される。

「ヨーギラス♪チーム書くんだってさ♪何か案無い？」

ヨーギラスは考える。チーム名を聞かれるなど、微塵にも思っていなかったからだ。ヨーギラスは唸り声をあげながら考え始めた。

「うーん……。そうだな……。ぶ、P-Rhythmかな？」

「理由は？」

「どんな逆境でもその瞳は輝きを失わない。そんな感じだな……。どうだ？」

「うん。それで良いんじゃない？」

ミニリュウの了承を得て、ヨーギラスはペンを走らせる。何故かのペンを持つ手に力が入る。

ヨーギラスは必要記入欄を全て埋めてペリッパーに用紙を渡す。ペリッパーは軽く頷いて、登録は完了した、とヨーギラス達に伝えた。

「さ…、て…。次の問題は家だな。ミニリュウ。空き家なんかあったりしないか？」

ミニリュウは頭を手で抑えるように、尻尾で頭を抱え込む。

「もし、120年前と同じなら……。1つだけ……。知ってる♪」

「案内してくれ。」

ミニリュウの案内の元、2人はその空き家に向かった。

歩く事、約30分。一件の空き家が2人の視界に入る。見た感じ、誰かが住んでいる様子は無さそうだ。

2人はこの場所に住む事に決めた。

「台所、さらに井戸まであるなんてな。良いところじゃないか？」

「そうだね〜♪」

と、言うわけで……

2人の救助隊生活は

今ここで幕開けを

迎えるのだった。

スタート!! (後書き)

ヨーギラス

「PーRhythm? ケンの物語と被ってんじゃない?」

そうだね。

でも、これには訳が…、

ゼルダの伝説と言うゲームがありますよね。あのゲームの主人公のリンクは色々なリンクが居ますよね。

スマブラXをやっている方はわかりやすいと思いますが、リンクとトゥーンリンクの2人が居ますよね。

リンクとトゥーンリンクは時代も場所も違いますが同じリンクの名を持つ者。

簡単に言えばリンクにも色々居る。と言う事。

この小説に言い換えれば、

PーRhythmにも色々居る。と言う事です。

長くなりましたが……、分かりました?

それでは、次回に……。

朝…その？（前書き）

久しぶりの更新ですm（　　）m

ヨーギラス

「本当に久しぶりだな（怒）」

（。□。；）

やばっ！！かなり怒ってるぞ……。

に、逃げる！！

ヨーギラス

「あ！！待てコラ！！」

朝…その？

ヨーギラスが目を覚ました。隣を見るとミニリュウが幸せそうな顔をして寝ていた。その口元からは涎が垂れていた。

布団から出て、とりあえず外を目指そうとする。

朝の空気は少し冷たかった。布団から出た時にそう感じた。

この家の前にはポストがある。なんでも、救助隊になるとペリッパ―がこのポストに依頼の書かれた紙を運んでくれるとか。

風が目の前を通り過ぎる。その風は少し湿り気を含んでいた。

ヨーギラスはこの風を肌で感じた時、何か例えような無い不思議な感覚を覚えた。古い記憶にあるような風の感覚と新しい何かが始まる感覚だった。

その感覚が何かわかりかけた時、ヨーギラスは心を踊らせた。

「何か入って無いか？」

ヨーギラスはポストを開ける。ヨーギラスは昨日からここに住み始めたので何も入っていないと思っていた。

「ん……？な、何か入ってる……ぞ？」

それを取るとヨーギラスは慌てて家に入った。

家に入るなりヨーギラスは布団で眠っているミニリュウを叩き起こした。

「んゝ（怒）。何ゝいきなりゝ（怒）？」

いきなり叩き起こさたのでミニリュウは起こっている。まあ、無理も無いか……。

「怒るなって……。それよりも何でこの家に荷物が届くんだよ！？ 昨日からここに住み始めたんだぜ！」

「だゝかゝらゝ。この家に住み始めた直後にゝ。ペリッパ―連絡所に行って住所の登録をして来たのゝ。」

「あっ……。だったら言ってくれりゃあ良いのに。」

「帰って来たらヨーギラスったら寝てるんだもんゝ（怒）。」

その言葉を聞かされヨーギラスは赤面する。昼寝のつもりで寝たのだが、昼寝を通り越して熟睡してしまったのだ。

これはもちろんヨーギラスが悪い。

「くっ……。だ、だったら起こしてくれれば良いだろ！！」

「ヨーギラスは涎垂らして寝てるんだもん。起こすのは何か悪いよゝ。」

自分が涎を垂らしてた……。

その言葉を頭の中でリピートする。するとヨーギラスはさらに赤面した。自分がミニリュウと同じような状況に陥っていたと言う事が恥ずかしいのだ。

「それと。依頼はポストにも届くけど、ペリッパ―連絡所の近くにある掲示板にも貼ってあるだって。行こうよーヨーギラス。」

「わ、わかったよ……。ん、でも何でそんな事知ってるんだ？」

確かに当たり前の疑問だ。ヨーギラスは昨日この世界に来た。同じ世界であっても年代が違えばルールや、新しい物が変わったり、出来たりするはずだ。なのに何故ミニリュウはその事を知っていたのだろか。その理由は…、

「え？だって昨日登録のためにペリッパ―連絡所に行った時に、もらった救助隊マニュアルに書いてあったよー♪」

「えっ？救助隊マニュアル？そんなのがあるなら早く言えー！！」

家のそばの森にまでその声が響く。

「それと何か届いたんでしょ？見せて。」

ヨーギラスは届いた荷物をミニリュウに渡す。その荷物を受け取った時のミニリュウの目は少し輝いていた。

「やったあ。救助隊スターターセットだー♪」

「救助隊スターターセット？」

キリが悪いが……、

次回へ！！続く！！

朝…その？（後書き）

ヨーギラス

「はあ…、はあ…、捕まえたぜ……。それにしても久しぶりの更新にしちゃあ随分と中途半端じゃねえか（怒）！！」

お許しを（泣）。

まあまあヨーギラス本当に落ち着いてくれよう。まだケンの執筆まだ何だから。

ヨーギラス

「これとそれは話が別。さあ、覚悟を決めろ！！」

や、やめっ……。

ぐああああああ！！

さあ、任務開始だ!! (前書き)

バコッ!!

ヨーギラス

「何やってたんだ?」

いったゝ(泣)。何すんだよ。

ヨーギラス

「いいから答えろ。何やってたんだ?」

え……、メダルオブオナーとか、ゴッドイーターを買って来て没頭してました(笑)。

ヨーギラス

「(笑)。じゃあ、ねえよなあ(怒)。」

(怒)。じゃあ、ねえよなあ(笑)。

ヨーギラス

「ふざけてんのか!!」

皆さん、久しぶりの投稿、楽しんでくれると幸いです。それでは。

さあ、任務開始だ!!

「救助隊スターターセット?」

ヨーギラスの聞き返しにミニリュウは少し誇らしげに胸を張りながら説明した。

「救助隊スターターセットって言うのはね、救助隊をするのに最低限必要な物が入っている箱なんだよ。これが、道具箱。」

ミニリュウは何か不思議な感じがする箱を見せて来た。そしてまた話を続ける。

「そして救助隊バッチ♪」

ミニリュウは卵のような形のバッチを見せて来た。ヨーギラスはこのバッチを見た瞬間にある思いを抱いた。

「ミニリュウ……、これ、聖なる欠片アイソープに似てないか?」

その思いの中に有った疑問をミニリュウにぶつける。ミニリュウは慌てて、ヨーギラスの口を抑え、耳元でこう呟いた。

「ヨーギラス……!! アイソープを探している奴らがまだ居るかもしれないでしょ!! 見つかったらどうするの!!」

ヨーギラスは苦しそうにミニリュウの尻尾を払いのけ、息を荒立てながら謝る。

ミニリュウは最後に一番下に入っていた封筒を取り出し、開けた。

どうやら手紙だったらしくミニリュウは読み始めた。

「『ビビビ。キミたちノコトハキヤタピーチャンカラキイタ。タノム。タスケテクレ。コイルガピンチナノダ。ドウクツニフシギナデンジハガナガレタヒヨウシニ……コイルトコイルガクツツイテシマツタノダ……。レアコイルトシテイキテイナクトモイツピキタリナイシ、コノママデハチュウトハンパダ。オネガイダ。タスケテクレ。ビビビ。ーコイルノナカマヨリー』だつて。ヨーギラス？い……。」

ミニリュウはしゃべるのを止めた。何故ならばヨーギラスの表情が変わっていたからだ。その表情は少しの笑みから出来上がっていた。ミニリュウにはその表情の意味がわかっていた。まあ、なんせ、あのつらい時を共に過ごして来た2人だからだ。

ミニリュウがバタフリーからもらったお札を道具箱に入れ歩き出す。

「おっし。ミニリュウ！！行くぞ！！」

2人は電磁波の洞窟に向かって歩き出した。その様子があるポケモンが伺っていた。

ー電磁波の洞窟入口ー

「オオ！キテクレタカ。ビビビ！」

電磁波の洞窟の入口には2人のコイルがいた。その内の片方のコイルがしゃべりだした。

「コノドウクツニワレワレノナカマガイルノダ。ビビビ。」

「ナカマハB6ニイルハズダナカマヲタステクレ。ビビビ。」

「よし。行くぞ。」

ミニリュウにそう言い、ヨーギラスは洞窟に向かって歩き出した。ミニリュウもその後を追った。コイル達は入口から少し離れ、ヨーギラスの帰りを祈りながら待つことにした。

コイルが入口から離れている隙にあるポケモンが洞窟の中に入って行った。

さあ、任務開始だ!! (後書き)

アイソープ?

ヨーギラス

「アイソープ。知らねーのか?」

いや、知ってますよ。

ヨーギラス

「しかし、ひでえな。アイソープは名前が最初決まらなかったんだろ。」

そうだね。だから、ある漫画から取りました(笑)。

ヨーギラス

「今日、笑ってばっかしだな。」

まあまあ。

それでは、次回も宜しくお願いします。

タール登場!! (前書き)

タールか……。名前むっちゃてけとーだな。

ヨーギラス

「随分と今回は事実を書いたらしいな。」

そうだね。君の名も書いたし、彼女の名も……。ね……。

ヨーギラス

「悪いが。作者。書き直せ。」

やだ。

タール登場!!

「どりあ!!……、ふーっ、終わった。やっぱこの程度か……。」

ヨーギラス達は敵をあっさり打ちのめし、ダンジョンの奥へ奥へと進んでいた。

ヨーギラスの命で、道具箱には、リンゴと不思議な珠しか入っていなかった。ヨーギラス的にこの程度の相手なら回復の必要は無いと考えたからだろう。

「ミニリュウ…、そっちはだい……。」

絶句した。ミニリュウはダンジョン内に出現した敵と遊んでいたのだ。

相手はコリンク。リンゴを転がしてじゃれあっていた。

暫く、ヨーギラスは硬直状態に陥った。我に還ったヨーギラスは無言、無表情のまま、ミニリュウを置いて歩き出した。

「あゝ、待ってよ〜♪」

ミニリュウはコリンクにじゃあねと言い、ヨーギラスを追いかけた。ミニリュウ自身、これが任務とは思っていないだろう。多分、遠足か何かと……。

ーダンジョン最下層ー

ヨーギラス達はダンジョンの最下層に到達していた。パツと見、何

も見当たらなかった。

「ここに居るはずなんだが……。！」

ヨーギラスは慌ててしゃがむ。ヨーギラスが避けたのはナイフだった。

ミニリュウは飛んで来たそのナイフを尻尾で掴み、投げ返した。投げた本人はナイフを避け、姿を表した。

「ほう……。これはこれはアイソープ所持者のお二人さん。初めまして、私、アイソープ回収係のタールと申します。今回はあなた方の持つアイソープを頂戴しに参りました。」

タールと言いポケモンは2つの腕を持ち、円盤のような体を持ち浮遊するポケモン、メタングだ。

タールの説明を聞いたヨーギラスの耳はピクリと動いた。そしてタールに向かって問い掛けた。

「タール。お前、まさか、ナイフ投げのタークルの子孫か？」

タークル。それは彼ら、ヨーギラス達が120年前に戦った相手でメタングの進化系であるメタグロスだった。

「祖父を知っているとは……。どうやらあなた方は“時代を駆ける逃亡者”ですね？」

ミニリュウはタールの話をシカトし、遊んでいる。それに対してヨーギラスは、

「知らねーな。」

の一点張りだった。

タールは溜め息を吐き出すとナイフを投げて来た。ヨーギラスはそれをかわした。ナイフを投げたタールはこう言った。

「それなら、“絶望の子”と呼ばれるのが好みですか？カイン君。」

ヨーギラスの耳がピクリとまた動く。ヨーギラスは強くタールを睨みつけ、こう言った。

「この名の意味。知ってて言ってるのか？知って言ってるのなら、殺すぞ……！！」

ピリピリと空気が揺れる。

タールはヨーギラスから視線を外し、ミニリュウの方を向いた。ミニリュウはタールとは違う方を向いている。

「あなたはどうかです？ミニリュウ……、いや、リアル。正式にはアガリアルプト。」

ミニリュウの耳がピクンと動く。そしてヨーギラスの方を向き頷く。

空気が震え始める。

「ならば強行手段に出ますか……。お手柔らかに。」

闘いが始まる。

タール登場！！（後書き）

えーと、
ですね。

後書きを見ている人だけの大公開！！

カインとアガリアルプトと言う悪魔の名前でしてね。

カインはアダムとイブの子で弟を殺した殺人鬼の名前です。

アガリアルプトは水を支配下に置く悪魔の名前です。

ヨーギラス

「悪魔の名前からとは酷いな。」

タール戦、決着！（前書き）

ヨーギラス祭りと言う訳で10話同時投稿です。

ヨーギラス

「タール戦に決着が着くぜ！！」

それでは、まず第？段！！スタート！！

タール戦、決着！

タールがナイフをミニリュウに向かって投げる。

ミニリュウはそれを手でキャッチし、タールに投げ返す。タールはそれを華麗にかわす。

ヨーギラスはそのかわされたナイフをキャッチし、タールに投げる。タールはヨーギラスの投げたナイフをかわせないと判断し、ナイフをキャッチした。

「かかったな。」

タールはその言葉を聞いて慌てて掴んだナイフを見る。そのナイフには炎の糸が結ばれていた。そしてその糸の先はヨーギラスが握っていた。

「さ、流石は炎のアイソープの所持者。炎をここまで使いこなすとは……。」

タールはそう言いながらナイフを離す。ナイフが落ちてカランと音を起てる。

その直後、タールの後頭部に水しぶきがかかる。

恐る恐る後ろを見るとミニリュウが水で作られた剣を口でくわえながら、笑っていた。

「くっ……。集まれ珠!!」

集まれ珠は同じフロアに居る仲間を自分の居る部屋に集合させると

言う珠だ。

大量のポケモンが集まる。

ヨーギラス達はその状況にも眉1つ動かさずにただ様子を見ていた。

「穴抜けの珠。」

タールはダンジョンから脱出した。その様子をヨーギラス達はぼーっと見ていた。

タールが居なくなり大量のポケモンがやって来たこのダンジョン。

「さて、ミニリュウ。」

「やっちゃおう♪」

2人の口にエネルギーが集まる。そのエネルギーは徐々に大きくなり、放たれた。

『『破壊光線”!!!』』

辺りのポケモンが悲鳴を上げながら、逃げようとする。しかしその時、既に遅し。

敵ポケモンは全て“破壊光線”に飲み込まれた。

「さて……と。コイルを探しますか……。」

ヨーギラスが反動から立ち直り、歩き出す。

ミニリュウはまだ反動で動けなかった。

「ヨ〜ギラス〜!! 待ってよ〜(怒)!!」

ヨーギラスはそれを聞き流すと、走り出した。

タール戦、決着！（後書き）

ヨーギラス

「反動はやっぱニガテだな。」

こいつとケンには戦わせたくないな。ケン、逝っちゃいそうだ。

ヨーギラス

「そこまで俺は強くないぞ。」

嘘つき。

コイル救助!! (前書き)

ヨーギラス

「やっと電磁波の洞窟からおさらばか。」

まさか、こんな序盤に時間がかかるとは思わなかった。

それではヨーギラス祭り第? 段!! スタート!!

コイル救助!!

ヨーギラスはフロア6をコイルを捜してさまよい続けた。

「あつ、あそこにいるよう。助けよう。」

ミニリュウがレアコイル擬きのコイルを発見した。

2人はコイルに近づき、そのままダンジョンから脱出した。

—ダンジョン前—

「カラダガハナレタ。ビビビ。ヨカッタヨカッタ。ビビビ!」

「ワイー!ビビビ!」

「ワイー!ビビビ!」

「ヨカッタナ。オマエナチ。オカゲデタスカッタ。アリガトウ。ビビビ!」

コイル達はヨーギラス達にお礼のポケと復活のタネ、さらにチーゴの実をもらった。

最後にコイルがぺこりと礼をすると、ヨーギラス達の前から去って行った。

—ヨーギラス達の家の前—

「ヨーギラス。今日の救助、うまく行って良かったよね。」

「予想外の事態が起きたがな……。」

無愛想な口調だった。しかしヨーギラスは笑っていた。

「ヨーギラス。疲れたから今日は寝よっか？」

そうだな。と小さくヨーギラスは言う。ミニリュウと共に家に入って行った。

そしたそのまま2人は夕飯も食べずに眠りに着いた。

次の日の朝。

ヨーギラスはまた1人で布団から出て、ポストを確認しに外に出た。

「何か入ってるかな……っと。んー、何も入って無いな。」

仕方無く家の中に引き返そうとする。

そしたらミニリュウが家から出て来た。

「おはよう。ヨーギラスはやいね。で、ポストに何か入ってた？」

ヨーギラスは首を横に振って合図をする。

ちえっとミニリュウが言う。ヨーギラスに向かってリング投げた。

「朝ご飯。食べたら出かけるよ。」

「出かける？どこに？」

ヨーギラスはミニリュウの言った意味が理解出来なかった。依頼が来ていないのだから救助に出かける事は無い。ならばどこに出かけ

るのか？

「ポケモン広場だよ♪とりあえずリンゴ食べたら行こ？」

ヨーギラスは訳が分からずも、リンゴを食べ、ミニリュウと共にポケモン広場に向かった。

コイル救助!! (後書き)

ヨーギラス

「無事任務達成だな。まさかタークルの孫が出て来るとはな。」

これから筋書き通りに書く事にするよ。
大変だから。

ヨーギラス

「続きの執筆も頼むぜ。」

多分な。

ポケモン広場……（前書き）

ヨーギラス祭り第？段。

スタート！！

ヨーギラス

「前書きが短過ぎだろ。」

ミニリュウ

「そうだよ。」

むうるさい！！！！

10話投稿するのは大変なんだよ！！

ポケモン広場……

ミニリユウに案内されて着いたのは、ペリッパ―連絡所の近くにある広場、ポケモン広場だ。

色々なポケモンが商業、雑談、情報交換などをしていた。

「ここがポケモン広場か……。随分と賑やかな所だな。」

「ヨーギラス♪まだ時間もあるし、自由に見て回れば？」

ミニリユウにそう言われたのでヨーギラスは1人で歩き出した。ヨーギラスには町のポケモンに尋ねたい事があったので好都合だった。広場はぐるっと一回りする。丁度その時、マダツボミを発見した。

「おい。」

「は、ハイッッ!! ななな何でしょう!？」

マダツボミはいかなり声をかけられたのと、ヨーギラスの少々荒っぽい呼びかけの所為で呂律が回らない喋り方になってしまった。

「尋ねたいんだが? GLAYって今でもあんのか？」

「GLAY? ああ、あの壊滅した組織ですね。もうありませんよ。……でも……。」

マダツボミは一気に表情を曇らせた。それが気になったヨーギラスはさらに尋ねる。

「でも？　どういう事だ？」

「実は……、GLAYは壊滅したのですけど……、GLAYの生まれ変わりとも言えるCRAZYと言う組織が新たに結成されたと言う噂があります。」

「そうか。ありがとう。」

ヨーギラスは情報を得、マダツボミに礼をすると考え事をしながら歩き出した。

ちなみにGLAYとは、ヨーギラス、ミニリュウなどが持つアイソープを狙う組織で、その戦闘力はかなり高かった。

「そのGLAYが壊滅した？」

うーんと唸りながらも、ペリッパ―連絡所を目指しながらゆっくりと歩く。

「GLAYが壊滅したけど、新しい組織が誕生した……。タールも恐らくその組織にいるな……。」

1人呟きながらペリッパ―連絡所に向かった。

ポケモン広場……（後書き）

ふう。

ヨーギラス

「さあ。次だ次！投稿しないで貯めるからこうなるんだ！」

ちっ。わかったよ。

やってやらあ！！

ヨーギラス

「ひねくれんな。」

大量依頼!! (前書き)

さあ。行くぜ!! ヨーギラス祭り第?段!!

スタート!!

ヨーギラス

「4のよはヨーギラスのよだぜ。」

意味わからん。

ミニリユウ

「ほお。」

あんたには分かるの!?

大量依頼！！

ヨーギラスは広場を抜け、ペリッパ―連絡所に向かった。ペリッパ―連絡所の掲示板の前にミニリュウが既に居た。

「うーん……。どれにしようかな？」

掲示板に貼られた幾つもの紙切れを見ていた。

ヨーギラスは軽い早歩きでミニリュウのいる所に向かった。

「何見てるんだ？」

ヨーギラスは掲示板を見ているミニリュウに話しかける。

「あれ？意外と早かったね♪これは掲示板♪」

「掲示板って言うのは見ればわかる。」

ミニリュウは少しムツとして、少し強い口調で続きを話始めた。

「最後まで聞いてよねー！この掲示板は依頼が貼られる掲示板なのだよー！」

ふーん。とほぼヨーギラスは無反応だった。その反応を見てミニリュウは少々ショックを受けた。

「悩むなよ。とりあえずこれとこれとそれにすればいいだろ。」

場所は全て電磁波の洞窟。

やれられた……

もう限界です……。

救助をお願いします！

依頼主・ヒマナツツ

目的・私を助けて

場所・電磁波の洞窟地下3フロア

お礼・復活のタネ、その他

タマタマが！

タマタマは混乱しているのかも！
助けて下さい！

依頼主・ケムツソ

目的・タマタマを捜して

場所・電磁波の洞窟地下4フロア

お礼・100ポケ

やれられた……

いつの間にか出られなくなりました！
何で？何でみんな襲って来るの？

依頼主・タマタマ

目的・私を助けて

場所・電磁波の洞窟地下5フロア

お礼・100ポケ

2人はペリッパ―連絡所を後にし、救助に向かった。

地下3フロアに居るヒマナツツを救助し、その勢いで残りの2人を助け、ダンジョンを突破した。

「案外簡単だったな。」

「そうだね♪」

「ミニリュウ。ちょっと後で話が……。」

ヨーギラスは急に声のトーンを下げ、目を真剣にした。

「わかったよ……。」

ミニリュウは頷きながら家に戻って行った。

大量依頼!! (後書き)

はあはあ……。た、タンマ…、

ヨーギラス

「何って言ってる暇は無い！次だ。そら行くぜ。」

もう死にそう。

ヨーギラス

「あっ、プリン。」

どこ！？どこ！？

ヨーギラス

「まだ働けるな(怒)。」

GLAY……。(前書き)

ヨーギラス祭り第?段!! スタート!!

まだまだ行くぞ!!!

ヨーギラス

「頑張れ。」

お前は気楽で良いなあ。オイ(怒)。

ヨーギラス

「あんたと違ってな。」

ムカつく(怒)!!

GLAY……。

「ミニリュウ。GLAYについてだが……。」

「うん……。」

ミニリュウは生唾を飲み込み、ヨーギラスの次の言葉を待つ。その空気だが、かなり緊迫していた。空気張り詰めていた。

「GLAYは壊滅した。だが……、」

「だが……？」

「新たな組織が誕生した。その組織の名は、CRAZY。」

ミニリュウは深刻な顔をした後、ニコツと笑い、リンゴを1つ口にした。

リンゴを食べ、ミニリュウは布団に入った。

ヨーギラスは少しの間は固まったが、プツと笑いリンゴを食べ、寝た。

次の日の明け方。

「あの……もし？」

どこからか声がする。ヨーギラスはその声により目を覚ます。ヨーギラスは辺りを見渡すが何も見当たらない。

「もしもし？あの……ヨーギラスさん……ですよね？」

謎の声がヨーギラスに尋ねる。最初は寝ぼけていた所為だと思っていたが、今の声でヨーギラスはこの声が現実だと判断した。

ヨーギラスはもう一度辺りを見渡すが何も見当たらなかった。

「……あつ、もしかして姿が見えない？これはどうも失礼しました！」

ヨーギラスの目の前からポケモンが現れる。そのポケモンは地中から出て来たのだ。

「初めまして。私達ダグトリオと申します。実は昨日の夜、地震があった後……私達の子供のディグダが襲われまして……高い山の頂上に連れ去られたんです。そんなとこ私達はとても登って行けないし……、ですのでここは1つヨーギラスさんをお願いしたい。と言う訳なんです。ディグダをさらったのはエアームドってポケモンです。とても凶悪な奴何で気をつけて下さい。何とぞ宜しくお願いしますではっ！」

そうヨーギラスに伝えるとダグトリオはまた地面の中に帰って行った。

ヨーギラスはミニリユウを起こし事情を伝えた。

「救助を頼まれたの〜!？」

そうです！その声が地面から聞こえたかと思うと地面からダグトリオがまた出て来た。

「私達の子供、ディグダがさらわれたんです！場所は鋼山の頂上です！何とぞ宜しくお願いします。ではっ！」

そうミニリュウに伝えるとダグトリオはまた地面に帰って行った。
いきなりにダグトリオが出て来たので驚いていたのか、ミニリュウ
の顔はポカンとしていた。

2人は道具箱の中を一旦整理してから鋼山に向かう事にした。

GLAY……。(後書き)

は、腹減った。

ヨーギラス

「だからどうした、君く作者!」

ドラ○もん歌詞に乗せて言うな。ムカつくから。

ヨーギラス

「知ったこったじゃあねえ。」

くっ……。

ディグダ救助!! (前書き)

さあ、ヨーギラス祭り第?段!! スタート!!

今回はこの小説初2000文字オーバー!!

ヨーギラス

「んなこと告知して暇はねえ。さっさと次行くぞ!」

休ませて……、

ミニリユウ

「ヤダよ〜♪」

ミニリユウまで……。

ディグダ救助!!

「ここだね♪鋼山は♪。ここの頂上にディグダが居るんだね♪」

「そうです!!」

ダグトリオがまたまた地面から出て来た。流石にヨーギラス、ミニリュウは驚かなかった。

「頂上は9フロアで。宜しく願いしますっ!では!」

そう伝え、また地面にダグトリオは地面に潜って行った。

6フロア目。

「か」。ドーミラーが7体か。

ヨーギラスはドーミラー7体に囲まれていた。ミニリュウは1人勝手に行動し、ここには居ない。

「回転して……、」

ヨーギラスは片足を軸にし、回り始めた。くると少々頼りない感じではあったが……、

「……そこから“火炎放射”!!」

回りながらの“火炎放射”により周囲7マスに居たドーミラーは一扫された。

ヨーギラスは1人で階段を探し、7フロアまで向かった。
7フロアから8フロアに向かう階段でミニリュウが座っていた。

「おそ〜い！」

「五月蠅いな……。ドミラーの相手をしてたんだよ。」

「ふ〜ん♪本当は階段探すの手間取っただけじゃないの〜♪」

くっ……。とヨーギラスは呟き、2人で階段を探し、9フロアに向かった。

頂上。つまり9フロア目。

「ヨーギラス。あそこにディグダが……。！」

ミニリュウに見つめる先にはディグダが居た。

ヨーギラスは手を振り、ディグダにこちらの存在を気づかせようとする。

「おい！大丈夫か？助けに来たぞ！」

ヨーギラスがディグダに向かって叫ぶ。

ディグダはその声でこちらに気づいたようで言葉を返して来た。

「……こ、怖いです。」

その言葉がヨーギラス達の耳に届いた瞬間、空からエアームドが舞い降りた。

「あんた達！何しに来たザマスか！？」

「任務で、ディグダの救出に来了。悪いが邪魔しないでくれ。」

「何言ってるザマス！悪いのはこいつらザマス！毎晩地震が起きて怖くて安心して眠れないザマス！それもこれもコイツらが地底で暴れるからザマス！！」

ミニリュウが珍しく相手の話を聞いていたらしくエアームドに反対した。

「それは違うよう。最近地震が良く起きてるって話は聞くけど、でもディグダ達が地底で暴れたぐらいで地震は起きないよう！」

ヨーギラスはミニリュウが誰かに反対する事を久しぶりに見たので驚いた。

しかし相手はその程度で納得する程甘くは無かった。

「五月蠅いっザマス！！文句あるなら勝負ザマス！！」

「ミニリュウ。駄目だ。エアームドは興奮して理屈じゃあ、納得しない。ここは無理矢理にでも落ち着かす！」

ヨーギラスは手を出し構えた。ミニリュウもその言葉を聞いて構えた。

ヨーギラスはエアームドとの間合いを堂々と詰めて行く。その行動をエアームドは怪しく思ったのか空に逃げる。

ヨーギラスの様子をエアームドは伺う。エアームドはヨーギラスの表情を見た。その表情がさらに彼女を不思議に思わす。ヨーギラスは妖しく笑っていたのだ。

「「巻き付く」ゝ!!」

空中でヨーギラスの様子を伺っていたエアームドはミニリュウの存在を忘れていた。

必死にミニリュウを振り解こうとする。しかしエアームドの力ではミニリュウを振り解く事は出来なかった。

「離すザマスっ!!」

必死にもがくエアームドの目にヨーギラスの姿が映る。

ヨーギラスは右手は空中に居るエアームドとミニリュウを指していた。

右手の指が一本だけこちらを指すようになり、その指に光が集まる。

「“破壊光線”。」

その言葉が放たれた瞬間にミニリュウはエアームドを解放し、逃げ出した。

その直後エアームドは放射状に放たれた“破壊光線”を見た。

「終わったな……。」

エアームドは地に倒れた。

「うむむ…まいったザマス。ここは一旦逃げるザマス！」

エアームドは残る力を振り絞って空へ逃げ去った。ミニリュウがそのエアームドを追おうとしたがヨーギラスに止められた。

「おい！エアームドは追い払ったぞ！ほら早く降りて来いよ。」

「ダメです……。怖くて降りられないです……。」

ヨーギラスは、はーっと溜め息を吐くとディグダを助けに行こうとした。

行こうとしたまでは良かった重大な事に気づいた。

ディグダと自分達の間には大きな穴が空いているのだ。穴と言うより崖だ。

「ミニリュウ。飛んで助けに行ってくれ。」

ミニリュウの方を見たが地面に倒れていた。ミニリュウの息は荒れていて、顔色が悪かった。

「あの時、エアームドに“毒毒”を浴びせられたのか……。」

ヨーギラスは道具箱の中を確認するがモモンの実は入っていないなかった。

「ちっ……。出発前に道具箱を整理したのが間違いだったな……。」

「ビビビ！」

ヨーギラスが悩んでいるとコイルがやって来た。

「ん？お前らは一昨日あったコイルか？」

「ダグトリオカラハナシハキイタ。ワレワレガソラカラディグダヲタスケヨウ。ビビビ！」

ディグダの所までコイルが飛んで行き、ディグダを救出した。その光景を見た直後に、ヨーギラスは道具箱からある珠を取り出した。

「早くここからおさらばするぞ!!」

ヨーギラスは穴抜けの珠を使用しダンジョンから脱出した。

家の前に移動した。ヨーギラスはミニリュウにガルーラの倉庫から取り出したモモンの実を食べさせ、ミニリュウ家の中に運び布団に寝かせた。

そしてまた家の前で……、

「うう……僕、とっても怖かったです。ずっと高い所にいた所為でしょうか……。まだ足が浮いている感じなんです……。」

（あ、足?……あるのか? 足が……?）

「まあ、でも帰って来れてよかったな。」

「はい。本当にありがとうございます。」

その言葉を放ちながらディグダはヨーギラスに礼をした。できればミニリュウにも聞かせたかったのだろう。

「おお! 助かったのかーっ! 良かった良かったーっ!」

その声を聞いた直後、ヨーギラスの頭に若干の呆れが出た。地面からダグトリオから顔を出す。

「どうもダグトリオです。」

「あっ！ パパー！」

「デイグダ！ 心配したぞ。ケガはなかったか？」

「うん！ こわったけど大丈夫。ヨーギラスさん達のお陰だよ。」

ヨーギラス達と言われてミニリュウの事を思い出す。

「お陰で助かりました。ありがとうございました。」

「悪いが……、礼ならコイル達に言ってくれよ。今回はコイル達に助けられたからな。」

ダグトリオはコイル達の方を向き、お礼の言葉を言い始めた。

「それはそれは。本当にありがとうございました！」

「イヤイヤ。タスケタノハトウゼンノコトダ。ソレニ……シンカケイガサンミイッタイトイウアタリ……シンキンカンモオボエテイルノダ。ヤハリポケモンドウシタスケアワナクテハ。」

「いやはや。ホント忝かたじけない。」

コイル達にそう言うのと、ヨーギラスの方を向いた。

「それではヨーギラスさん。ありがとうございました。ではっ。」

ダグトリオ達はヨーギラスにお礼の品を渡し、そう言うのと帰って行

った。

お礼は500ポケ、モモンスカーフ、カテキンをもらった。

「デハ、ワレワレモ……。」

ヨーギラスにそう言うのとコイル達は帰って行った。

「ああ。じゃあな。」

ヨーギラスはコイル達に手を軽く振って見送った。

ヨーギラスはコイル達が見えなくなると、家に戻って行った。

下を俯きながら。

ディグダ救助!! (後書き)

死ぬ死ぬ。

死にそう〜!!

指がボタンを押す指が悲鳴をあげない。だけど、前書きと後書きを書くと内容を考えるのが疲れるうう!!

ヨーギラス

「五月蠅いな。嘆く暇があったら投稿しろ。」

ちくしょーうう!!

1人くつろぎやがってええ (泣) !!

レノ……？
(前書き)

ヨーギラス祭り第？段く！！さあ、どんどん行くぜー！！

ヨーギラス

「お前の母さんが飯だっって言ってるぜ。」

もうちょい待ってええ！！

ヨーギラス

「待って欲しいなら頑張れよ。」

レノ……？

ヨーギラスは家に戻って、寝ているミニリュウの隣に行った。ヨーギラスはそのミニリュウの隣に座った。

「レノさん。すみません。ミニリュウをまた傷付けさせてしまいました……。」

ヨーギラスは小さな声で謝る。今はいないそのレノと言う人物に……。

「俺も……、寝るかな……。」

ヨーギラスも布団の上で寝始めた。

ヨーギラスは次の朝、朝遅く目を覚ました。

「ミニリュウは寝てるのか。とりあえず依頼を受けに行くか……。」

ヨーギラスは布団から出て、ポケモン広場を通りペリッパ―連絡所に向かおうとした。

広場中央にポケモンだかりがあった。何かと思ひ様子を見る事にした。

「お願いです！」

「駄目だ。そんなんじゃ、依頼は受けられないな。」

見ればワタツコとダーテングが話をしていた。と言うよりワタツコがダーテングに何か頼み事をしているようだ。

「でもどうしても風が必要なんです！お願いします！」

ヨーギラスは少し状況が詠めなかったので近くにいたハスブレロに尋ねた。

「何があっただ？」

「ん？あれか？ワタッコが救助を頼んでんだが断られてるんだ。あそこにいる奴。」

ハスブレロは指を指しながらダーテングについて話始めた。

「あの鼻の尖った奴。あいつはダーテングってポケモンでアイツも救助隊、やってるんだけど……、アイツのチームがめつくてお金沢山貰わないと引き受けないんだ。ワタッコもあんなに頼んでるのに……可哀想だよな。」

ハスブレロがワタッコに同情の言葉をかけた時、どこからか声がした。

「待て……！！」

それらはヨーギラスが居る所とは正反対からやって来た。

どうやら救助隊のようだった。メンバーはリザードン、バンギラス、そして先頭にいるフリーデインだ。恐らくフリーデインがリーダーだろう。

「おっ、お前達は！？」

どうやら有名なチームらしくダーテングはかなり驚いていた。

「おお、フリーディンだ！」

「あれがあのでフリーディンか！」

広場にいたポケモン達が口々にそう言った。

「おい。可哀想じゃないか。」

フリーディンはダーテングとの距離を詰め、そう言った。

「ワタツコの仲間を助けるには風が必要なのだ。お前の葉っぱの団扇は強風を巻き起こせる。お前にとっては簡単な事じゃないか。頼みを聞いてやれ。」

フリーディンに圧力をかけられ、ダーテングの心は折れ始めた。ダーテングは辺りを見渡すと、ギャラリーのその姿勢により心が完全に折れた。

「うっ……ちっ、分かったよ。」

ダーテングはそう吐き捨てると、仲間のコノハナと共にそそくさと逃げて行った。

「すげえ……。」

「あのダーテングが大人しく言う事を聞いたぞ……。」

また辺りのポケモン達が口々にそう言った。

そのフリーディン達の事を知らなかったヨーギラスは気になりまたハスブレロに尋ねた。

「おい。奴らは何だ？」

「お前知らないのか？フリーディンのチームを！ここらじゃ一番有名な救助隊だぞ！」

ハスブレロは後ろに飛び跳ね驚いた。そしてフリーディンのチームについて語り始めた。

「あいつはリザードン。“火炎放射”で山をも溶かす！そしてバンギラス。鎧の体とパワーが自慢。そしてあれがリーダーのフリーディン。フリーディンは力業をこのまじろ超能力で勝負する。知能数5000のスーパー頭脳の持ち主で：世の中の出来事は全部記憶しているらしい。命令するのは全てフリーディンだ。言わばチームの司令塔だな。」

ハスブレロはフリーディンのチームで熱く語った。ヨーギラスはその凄さがいまいち伝わらず、

（とりあえず……、凄いらしい。）

と言った感じだった。

「あ、ありがとうございました。」

ワタッコはフリーディンの所に駆け付け、お礼を言った。

「いや。当然の事。また断られるようだったらワシに言え。では。」

そう言うところヨーギラスの所に向かって歩いて来た。その間にも彼らを褒め称える声は鳴り続けた。

「カッコイイ……。」

「流石、ゴールドランクのチームは違うよな。」

ふーんとヨーギラスには余り興味ある事では無かった。そのヨーギラスの様子を見る者が居た。

「ケケッ！ 良いカモみっけ！」

そう笑うとそうポケモンはそこから去って行った。

ヨーギラスはミニリュウの体調が良くなるのを待つ為にこの日は依頼をこなさなかった。

次の日の朝……。

「おはよう。ヨーギラス♪」

ヨーギラスはミニリュウの声で目を覚ました。

「体調は良いか？」

「うん。心配かけちゃったね。」

ヨーギラスはミニリュウに朝食を用意してくれるように頼むとポストを見に行った。

レノ……？（後書き）

まさか自分を自分でここまで追い詰めるなんて……。

ヨーギラス

「バカだな。単なるバカだろ。」

ミニリュウ

「そうだね♪バカだね♪」

お前らああ！！作者を怒らせたらどうなるか、

ヨーギラス

「“破壊光線”。」

わががががっつでんのがああああ！！↑悲鳴と怒りの声

ライバル登場か!?(前書き)

ヨーギラス祭り第?段!?!さあ、盛り上がってこー!!

ヨーギラス

「何で何段の数字がローマ数字何だよ?」

カッコイいからさ。

ヨーギラス

「幼稚だな。作者は。」

とことんムカつくな。キャラ設定間違えたかな?

ライブル登場か!?

ヨーギラスはポストの中を見た。

しかし中には依頼は入っていなかった。仕方なく家の中に戻る。

「はい。」

家に入ると、ミニリュウからオレンの実とモモンの実が渡される。それをかじりもぐもぐと食べる。

「さて……。依頼をこなすか……。」

食事を済まし、ペリッパ―連絡所に向かう。その途中で昨日起きた事をミニリュウに話した。

依頼を受けダンジョンへヨーギラス達は向かった。

電磁波の洞窟

「ここらに居るはずなんだが……。」

ヨーギラスは電磁波の洞窟の3フロアで依頼主を捜していた。ミニリュウはいつもの事で個人行動。

「あいつも捜すの手伝ってんだ……。」

ヨーギラスは1人苦勞し探し出しましたとき。

2人は依頼主からお礼を貰い家に帰り眠りに着いた。

次の日の朝。ヨーギラスはいつも通りにポストへ向かった。

「ここかい？ P—R h y t h m ってチームがある所は？」

「何もねえぜ。ここ。」

ヨーギラスが見るとそこにはゲンガー、アーボ、チャーレムがいた。何か話ているようだ。

「殺風景な所だね。」

チャーレムが悪口を述べた。しかしヨーギラスにとっては耳に障る発言には聞こえなかった。

「ケツ、こんな所で救助隊やろうなんて信じられねえぜ。」

ゲンガーがそう言いヨーギラスに向かって歩いて来た。

「何だ？ お前らは？」

「あっ！ あんな所にポストが♪」

チャーレムがヨーギラスの質問を無視し、ポストに近づいた。

「ホントだ！ 中、見ちゃおうぜ！」

ゲンガー達はポストの中を物色し始めた。そして中に入っている依頼を全て奪った。

「お前ら依頼返せ。」

ヨーギラスがチャーレムに文句を言うと、

「五月蠅いわね。」

「さっさとずらかるぜ!!」

ゲンガー達はそくさと帰って行った。ヨーギラスは追おうとしたが、深追いは危険だと判断し、追跡はしなかった。

「ちっ……。あいつら……。今度会ったら承知しねえぞ。」

そう。呟いて家に戻ろうとした時、空からペリッパーがやって来た。ペリッパーはポストの上に降り立つと、ポストに何かを入れて帰った。

ヨーギラスはポストを開け中身を確認した。

「新しい依頼か……。助かったな……。」

この日もヨーギラス達はペリッパーから届いた救助依頼をこなし、食費を稼いだ。

「全く…、それにしても救助隊を邪魔する奴らが良く救助隊何て出来るよな。」

ヨーギラスはまだゲンガー達の事を根に思っていた。

「お休み〜♪」

ミニリュウのその声を聞き、ヨーギラスも仕方なく眠った。

ライバル登場か！？（後書き）

ヨーギラスのキャラ設定を少し変えるかな。
ポチッ！

ヨーギラス

「何ですか？ご主人様？」

間違えた。もう一度！

ポチッ！

ヨーギラス

「やんのかゴラァ……！！！！！！」

やっぱり昔のままでもいいや。

ムカつく奴らだ……。 (前書き)

終盤に近づいて来たヨーギラス祭り。それでは、
ヨーギラス祭り第？段！！スタート！！

ヨーギラス

「スタートって言う位置がおかしいと思うんだが……。」

仕方ないだろう。間違えたんだから。最初間違えたから、直すのが
面倒になったのさ。

ヨーギラス

「自慢じゃあ、ねえな。」

うん (泣)

ムカつく奴らだ……。

「ヨーギラスさん！ミニリュウさん！」

ヨーギラスは珍しく早起きしたミニリュウと共に外に出ていた。そんなヨーギラス達を呼ぶ者がいた。

「あつ、キャタピーちゃん♪久しぶり〜♪」

「お願い！友達を助けて！」

キャタピーはいきなりヨーギラス達に助けを求めた。ヨーギラス達は事情が飲み込めず、尋ねた。

「どうしたんだ？」

「友達のトランセル君と一緒に遊んでただけど……、トランセル君、森に迷って出られなくなっちゃったんです……。」

キャタピーは一通り事情を説明した。つまり、森で迷ったトランセルの救助だ。

「ほおお、それは大変だな。ケケケッ！」

その話を盗み聞きしていた、ゲンガー達がやって来た。ゲンガー達を見たヨーギラスは思わず呟いた。

「お前らは！？」

「トランセル君は俺達が助けてやろう。」

ヨーギラスの話をもたも無視し話を続ける。流石にカチンときたヨーギラスは文句を言った。

「また依頼を横取りするのか？」

「無名の救助隊が助けられると思うのか？」

「何だと？」

「誰が助けようが関係無いね。助けた奴がエラいのさ。」

ゲンガーはヨーギラスから視線を移し、キャタピーの方を見た。

「なあキャタピーちゃん。こうしないか？どちらか先に助けたチームにお礼をあげると言うのは？」

ゲンガーはキャタピーに案を持ち出した。しかしキャタピーは小さな声でこう返した。

「僕…、お金持って無いです……。」

「そんなの心配しないでいいよ。お金なら後でお母さんからガツポリ貰うからさ。ケケッ！そうだ。ついでに俺達の仲間にもなって貰おう。キャタピーちゃんが仲間になったらイジワルズの幹部にしてあげるからね。ケケケケッ！」

ゲンガーはキャタピーに無理矢理な報酬を押し付けると今度はまたヨーギラス達の方を向いた。

「そういう訳だ。ヨーギラス。先に助けた方が勝ちだからな！」

そうヨーギラスに言い残すとゲンガー達は走って救助に向かった。
キャタピーはゲンガー達が行った後黙り込んでしまった。

「大丈夫♪お姉ちゃん達に任せときなさい♪」

そうキャタピーに言うミニリュウは1人歩き出した。ヨーギラスもその後を追った。

ヨーギラスは怪しい森に向かう途中、ミニリュウにゲンガー達の事を伝えた。そして昨日何があったかを。

「よし。着いたな。ここか？トランセルが迷ってるのは？」

「そうだね。急ごう。」

2人は森の中に足を運んだ。

ムカつく奴らだ……。 (後書き)

意外と早く終わりそう。

ヨーギラス

「意外とか？ 同時投稿とか言ってたくせに。」

やっぱムカつくな。よし、また設定変えよ。

ポチッ

ヨーギラス

「そんなんだからあ、執筆にも時間かかるのよ。」

お、女の子っぽくなったあ！？ やっぱ直そ。

ポチッ

ヨーギラス

「うるさいなあ。僕だって頑張って勉強してるんだよ。」

なんか子供っぽくなっちゃったよ。今度は……。

うん。どれも似合わん。直そ。

トランセル救助!! (前書き)

ヨーギラス祭り最終回!! ヨーギラス祭り第?段!!

ヨーギラス

「僕にも言わせて?」

あれ?この前の状態のままだ。後で直さなきゃ。

ヨーギラス

「さあ、スタートだよ☆」

ちよつと似合ってる……かも?

トランセル救助!!

ヨーギラス達は必死にダンジョンを探索し、トランセルの救助に努めた。

「もう9フロアか……。だいぶ奥まで来たな。」

「そうだね。」

ミニリュウの声がいつに無く真剣だった。その声は静かに響いた。その直後、草村からガサガサと言う音が周囲に響く。ヨーギラスは敵と判断し攻撃体勢に入った。

「クウディアス」!

ヨーギラスの右手に灰色の光が集う。その光はヨーギラスの右手を包み込んだ。

「テルペストナ」!

ミニリュウの尻尾に水色の光が集う。その光はミニリュウの尻尾の先端を包み込んだ。

ヨーギラスとミニリュウは互いの右手と尻尾を近づける。

『“超融合”!!! “テルディアス”!!!』

爆風と大量の水がその草村に向けて放たれる。その草村は跡形もなく吹き飛んだ。しかしそこには何も居なかった。

「何も居ない。」

「いや多分……、今ので流されたんだろ。」

草村があつた所は跡形も無く吹き飛び、その後ろにあつた木々も消し飛んでいた。

その後も速急に階段を見つけ出し奥へ向かった。

13フロア。

「だいぶ森の奥まで来たな。この近くにトランセルが居るのか？」

ヨーギラスがさらに奥に進もうとした時、

「ちょっと待ったー！」

聞き慣れた声が後ろから前に流れる。ゲンガー達はヨーギラス達の前に先回りした。

「ケケツ、トランセルを先に見つけるのは俺達だ。ここから先は……行かせるワケには行かねえなあ。」

「だったら力ずくで通るまでだ！」

ヨーギラスの言葉でゲンガー達は構えた。それを見たヨーギラス達も構えた。

風が木の葉を落とす。その葉が地面に落ちた瞬間、ミニリュウは動いた。

「龍の波動」！」

3人に向けて放たれた“龍の波動”。それを軽々とかわし再びミニリュウの方を見ると、ミニリュウはいなかった。

「龍の覇道」！」

後ろから龍の形を模したエネルギーがゲンガー達に向かって行く。いきなりの攻撃だが、ゲンガー達は間一髪でかわした。

「俺の事を忘れんなよ。」

ヨーギラスが緊急回避をした、ゲンガーの前に現れる。

ヨーギラスの両手の人差し指に光が集まる。

「キ（ダブル）・ゼロ・レイ」！！」

指から“破壊光線”が放たれる。2本の光線は真っ直ぐゲンガー達に向かった。ちなみにこの技の意味は“無に還る2つの光線”だ。

「ま、“護る”だ！」

「“護る”よくん！」

「“護る”だぜ！」

ゲンガー達は最後の手段として絶対防御技の“護る”を使った。

「ミニリュウ！決めてくれ！」

ヨーギラスがミニリュウに向かって叫ぶ。ミニリュウはコクリと頷くと技名を言い出した。

「フォールスアングラー」！！」

森の上から水しぶきが降って来る。

ゲンガー達は何も起きないので防御体勢を解除し、ミニリュウを攻撃しようとした

「シャドーボ……、ぐがああああ！！」

ゲンガーの体に鋭い痛みが走る。それはアーボもチャーレムも同じだった。痛みが走ってからゲンガーは気づいた。ミニリュウが放った技の意味を。

ミニリュウは空中高くに大量の水を出現させ、後はそれが何も知らない敵の頭上に落ちてくるのを待つのだ。

ゲンガー達は痛みで倒れそうになるのをこらえ、

「ちくしょー。覚えてろよー！！」

悪役らしい台詞を吐き捨て、逃げ去った。

ヨーギラスは反動で動けないのでミニリュウがトランセルを捜す事になった。

ミニリュウがトランセルを捜していると、

「あの……。」

どこからか声が聞こえて来た。その声は徐々に近づいて来た。

「もしかして探しに来てくれたのですか？」

「君がトランセル君だね。さあ、帰ろう？ キャタピーちゃんが心配してたよ？」

「わーい！ 怖かったんでカラを堅くしてずっと待ってたんです。ありがとう！」

トランセルをヨーギラスの所に連れて行き、穴抜けの珠を使ってダンジョンから脱出した。
家の前に戻って来て、

「良かったね！ トランセル君！」

「ありがとう！ キャタピーちゃん！」

2人は喜びを分かち合った後、ヨーギラス達の方を向いて、お礼を言い始めた。

「ヨーギラスさん、ミニリュウさん、ホントにありがとうございます。でも僕お金無いです……。」

「いいよ、いいよ。仲間が無事なんだから♪」

ミニリュウがキャタピーにそう言う。するとキャタピーの目があの時のように輝きだした。

「カッコイイ……。僕ますます憧れちゃいました！ 僕も大きくなったら救助やりたいです！」

「うん♪頑張って♪じゃあね♪」

ミニリュウはキャタピーとトランセルに尻尾を振って見送った。
ちなみにこの時、ヨーギラスは反動で動けないどころか喋れなかった。

「ったく。あの技は多様しちゃ駄目だな。威力を弱めても反動でかなりの間動けねー。」

ヨーギラスはそうミニリュウに愚痴を垂れた。ミニリュウはそれを笑って聞いていた。

「でもやっぱり、誰かを助けるのって良いな。あの人が俺を助けてくれた理由がわかったような気がする。……ミニリュウそろそろ寝るか？」

ヨーギラスはミニリュウの顔を覗き込んだ。その顔は幸せな顔をで眠りに着いていた。

「フライングだぜ。」

ヨーギラスも夢の世界に入って行った。

トランセル救助!! (後書き)

さて。直さないと前書き後書き面倒にはなんないけどややこしくなる。

ヨーギラス

「作者さん。何するの?」

ミニリュウ

「わお♪ヨーギラスが変わった♪」

ミニリュウまで出て来たぞ。

ミニリュウ

「前書き後書きでのヨーギラスはこれにしてね♪」

え? はい。わかりました。

(逆らってはいけない。逆らったら……。)

ミニリュウ

「逆らったら…わかるよね?」

ミニリュウの設定も変えちゃったかな?
流石にミニリュウは直さないと……。

雷の曹（前書き）

えーっと、ヨーギラス君。

ヨーギラス

「はーい！」

やっぱ直す！

ミニリユウ

「だーめー！！ “破壊光線” ！！」

わ、わかった！止めるから……、止めっ……。

チーン

雷の曹

「あのー……もし？」

朝の運動をしていたヨーギラスとミニリュウを誰かが呼ぶ。ヨーギラスが振り向くとそこには、ワタツコがいた。

「あのー……、救助隊P－Rhythmはこちらでしょうか？」

「そうだが……。ん？あんたは確か……。広場に居たワタツコだな。ダーテングが依頼を受けた、あの。」

「はい。ですが、そのダーテングさんが……。救助に行ったきり戻って来ないのです……。」

「何？」

ヨーギラスが反応した。

ワタツコは依頼内容について話し始めた。

「仲間のワタツコが岩場に挟まって動けなくなっただけです。私達ワタツコは風に乗ればどこにでも行けるのですが……。空は雷雲で一杯なのに何故か風が吹かないのです。」

「風が吹かない？」

「ダーテングさんは葉っぱの団扇で強風を巻き起こせます。ダーテングさんの風で仲間を助けて貰おうと頼んだのですが……。」

「帰って来ないんだね。ヨーギラス…」

ヨーギラスを見るとヨーギラスもミニリュウを見ていた。
2人は頷いて歩き出した。

「ワタツコ。ダーテングを救助に行く。任せとけ。」

ヨーギラスが振り向き、ワタツコにそう言うと、走り出した。ダーテングがいると言う沈黙の峪と言う場所に向かって……。

—沈黙の峪入り口—

「うわっ！すごい崖だね。」

入り口の横にある峪の下を見ながらミニリュウが言う。

「この奥に仲間のワタツコがいるんだね？」

ミニリュウは視線をワタツコに移し、そう尋ねる。

「そうです……。すみませんがお願いします。」

「大丈夫だって！行こうヨーギラス！」

「おう。」

2人は入り口から内部に入って行こうとする。

「あの！」

ワタツコに呼び止められた。先程より深刻な顔をしていた。

「実は言い忘れた事が……。ここは沈黙の峪と言う場所なんです……ここには物凄い怪物が眠っているってウワサがあるんです。」

「わかった。ミニリュウ行くぞ。」

ヨーギラスはウワサなど全く気にしてはいなかった。

沈黙の峪の地下10フロアに居るとワタツコから伝えられた。

ヨーギラス達は敵をもろともせずにとんどん奥深くに進んだ。

地下9フロア。

2人は空中をメガヤンマに地上をナツクラーに囲まれていた。

「とりゃあ！」

ヨーギラスはミニリュウを踏み台し、空中に回転しながらジャンプする。

ミニリュウは空中にヨーギラスが行ったのを確認し、自ら回転し始めた。

2人は大きく息を吸い込んだ。

「“火炎放射”！！」

「“バブル光線”！！」

ヨーギラスにより空中のメガヤンマが、ミニリュウにより地上のナツクラーが、一掃された。

そのまま2人は階段に向かって走って行った。

「確かここらだな。ワタッコがいるのは……。」

ヨーギラス達が辺りを見渡していると、前からワタッコがフラフラと頼りなく歩いて来た。何かが合ったらしく体が震えていた。

「救助隊だ。大丈夫か？」

ヨーギラスがワタッコに近寄って話し掛ける。ワタッコは静かに頷いた。

「はい……。ワタシは平気ですが……」

「ワタシは？」

ミニリュウはワタッコの言った言葉が気になった。その理由を尋ねると……、

「奥にダーテングさんが……。」

「ダーテングが？」

ミニリュウはヨーギラスの方を向いた。その時にはヨーギラスはもういなかった。

「ワタッコさん。ついて来て！」

ミニリュウはワタッコを先導しながらヨーギラスの後を追った。奥に進むとダーテングが倒れていた。その隣にヨーギラスが座って尋ねている。

「しっかりしろ。何があった？」

「俺の事はいいいから……早く逃げろ！」

「逃げろだと？」

そうヨーギラスが尋ね返した直後辺りが暗くなった。ミニリュウはワタツコの側に近寄り、安全を確認した。

ギヤオオオオオ！！！！

雄叫びが響く。

「どけ！貴様ら！コイツは我の眠り妨げたのだ！邪魔する奴は容赦しない！もちろん貴様らもな！」

何かがそう言うのと辺りは一気に眩い閃光に包まれた。何が起こったかをヨーギラスは速やかに確認する。

「！ダーテングがいない！」

そしてダーテングが居た場所の近くには新たな存在があった。その姿は雷を模したような黄色く尖った羽と鋭い嘴を持った大きな鳥だった。

「我が名はサンダー！雷の曹！ダーテングを助けたくば雷鳴の山に
来い！」

ギヤオオオオオ！！

サンダーはそう伝えると雄叫びをあげて飛び立って行った。

「あれがウワサの怪物か……。まあ、なんとかなんだろう。」

とヨーギラスは言い、穴抜けの珠を使用しダンジョンからワタツコを連れ脱出した。

雷の曹（後書き）

何か最近ヨーギラス達にボコされてるな。良し。ならば、こちらも手段を考えなければな……。

ミニリュウ

「その手段とは？」

うーん。今はまだ……、ってミニリュウ！？いつからそこに！？まさか全部聞かれた！？

ミニリュウ

「うん♪」

雷鳴の山へ……（前書き）

ヨーギラス

「タイトルまんま。つまんねーな。」

まんまさ。ああ、まんまさ！なんか文句あっか？

ヨーギラス

「さっき文句言ったじゃん。つまんねーなって。やはり馬鹿だな。」

コンチキショー！！

雷鳴の山へ……

家の前に来て。

「わーい！助かったんだ！よかったあ！」

依頼主のワタツコが満面の笑みで喜ぶ。それに反して、助かったワタツコが言った。

「でもワタシが助かった代わりにダーテングさんが……。」

自分の少なからず責めているような口調と顔付きだった。そこに状況が完全に把握しきれていないヨーギラスが尋ねる。

「教えてくれ。一体何があった？」

すると、助かった方のワタツコが静かに口を開いた。

「……はい。ダーテングさんは団扇で風を起こし……岩場にいたワタシを助けたんです。しかしその風が雷雲を2つに切り裂き……その時あの怪物が姿を表したのです。」

「アイツ……サンダーとか言ったな。」

そうヨーギラスが口から零した瞬間、どこからか大きな声が聞こえた。その台詞はどうやらサンダーを知っているようだった。

「サンダーだと!？」

フリーディン達が歩いてヨーギラス達に寄って来る。
そしてヨーギラス達の隣に来た時、口を再び開いた。

「サンダー……。伝説の鳥ポケモンの1つだ。ずっと眠っていたと聞いていたが……。」

「ダーテングが起こしたらしいんだ。」

ヨーギラスがフリーディンの話の隙間に言葉を滑り込めます。

「いや。ダーテングの風はキツカケにすぎない。そもそもあそこに風が起らない事、事態がおかしかったのだ。全ては最近良く起きている自然災害が原因であろう。眠りを妨げられサンダーは怒っている。ダーテングを助けなければ。」

フリーディンの話が切れた時、バンギラスが補足を促すかのように言った。

「サンダーは手強いぞ。奴の電撃は強力だ。」

「わかっている。慎重に行かなくては。」

フリーディン達が行動を開始しようとする。そこにミニリュウが口を挟んだ。

「行くよ。ダーテングを助けに。」

その言葉を聞いた時、フリーディンは驚きで目を見開いた。

「なんと！それは危険だ。」

フリーデインの言葉は忠告では無く警告だった。普段とは違う完全なる否定そのものだった。

「サンダーは強いぞ。お前達の実力では無理だ。」

「なによー！そんなに私とヨーギラスはそんなに弱くないよ！それにサンダーなんて怖くない！」

ミニリュウの言葉はいつもよりはつきりとして真剣な声まっすぐと言葉だった。

「それに俺らは救助隊だぞ。救助隊らしく救助をこなしても良いだろう？」

フリーデインが黙り込む。暫くの沈黙の後、フリーデインが喋り出した。

「わかった。お前達の勇気、認めてやろう。雷鳴の山には2チーム別行動で行こう。ワシ達は闘う準備を整えてから行く事にする。相手の強さを考えると慎重に成らざるをえないのだ。お前達も準備が出来次第、雷鳴の山へ向かうと良い。目指すはダーテング救助！共に頑張ろう！」

そうヨーギラス達に伝えるとフリーデイン達は準備の為にポケモン広場に向かって歩いて行った。

雷鳴の山へ……（後書き）

さて、次回はついにサンダーとの決戦を繰り広げる……はず。

ヨーギラス

「この小説始まってから初めてだな。そういうのやるの。てか曖昧だな。」

ま、気にすんな。

悪魔の……（前書き）

判りづらいようなのであらすじを。

ヨーギラスとミニリュウは平和に暮らしていた。しかしある時から何故かGLAYと言う部隊に追われるようになる。アイソープを所持していたからだ。アイソープは後ほど語られる。

追われる最中、ヨーギラス達はアイソープを持つレノと言う人物に出会う。レノの下で修行をしながら逃亡を続ける。

しかしある時、大量の兵を率いてGLAYが迫る。その時、レノが敵の攻撃の盾となりヨーギラス達を異世界へ逃がした。

ヨーギラス達は別の世界に辿り着く。その世界から別の世界にまた移動する事になった。（僕らの話し合いより。）

移動した先の世界はレノがいた世界だ。しかしあれから120年が経っていた。

自分達で生きていく事になったヨーギラス達は食費などを賄う為に救助隊を結成する。幾つかの依頼をこなし、今回のダーテング救出の任務にあたる事となった。

こんな感じでしょうか？わかりにくかったらすみません。

悪魔の……

雷鳴の山に向かう日。

ヨーギラス達は先日フリーディン達に教わった場所を目指し、地図とにらめっこをしながら雷鳴の山を目指していた。

そして、ついに雷鳴の山の麓に到着した。

「ここが雷鳴の山の麓か。フリーディン達は既に向かっているのだろうか？まあ、とりあえず、ダーテングの救助を完遂させるか。」

ヨーギラスはミニリュウに手招きすると、雷鳴の山に入って行った。

ヨーギラスは今、デンリュウと対峙している。

実はこのデンリュウ、ヨーギラスの全力のパンチを一撃喰らっているのだ。

（流石は怪物が巢を喰らう山か……。住んでる奴も化け物みたいだな……。）

1人感心しながらデンリュウのとの間合いを堂々と詰める。

そのヨーギラスに向かってデンリュウは構わず、“気合いパンチ”を放つ。

「うおお！？」

ヨーギラスはデンリュウがそのような強力な技を使用するとは思わず、不意を突かれた。

慌てて右手を軌道上に出し、パンチを防ぐ。

「ぐっ！」

ヨーギラスの小さな体を宙に浮く。ヨーギラスはゆっくりと体勢を立て直そうとする。

「！！」

体勢を立て直そうとしたヨーギラスの視界に敵の技が入る。その技はデンリュウのものではなかった。

「があっ……！！」

その技を放った本人はヨーギラスにはうつすらとしか見えなかった。何故ならば、その一撃が重く、当たりどころが悪かったため、ヨーギラスは気絶してしまったからだ。気を失う直前に見えたその姿は……。

（ふ、フーデイン……！！）

ドサリ！

地面にその体は落ちる。

「さて。ターゲットの回収を頼むかな。」

攻撃した本人はヨーギラスを抱えようとする。その口元は妖しく笑っていた。そしてその足元にはデンリュウが倒れていた。

ヨーギラスに手を触れようと時、その手が掴まれる。

「イかれた野郎の薄ぎたねえ手でこいつに触るな。」

「その風格……、ルシファーですか。アイソープ所持者の大将の。分が悪くなりました。仕方ない。ダーテング救出という建て前上の任務を果たしますか。」

そう言うと、その者は“テレポート”を使い、消えた。

ルシファーと呼ばれたポケモンはがっしりとした体つきに赤い羽を持つ竜、ボーマンダだ。しかし普通のボーマンダと違いその羽は片方が黒く、片方が白かった。さらにその背中にはミニリュウが乗っていた。ミニリュウも気絶している。

ルシファーがヨーギラスを起こす。

「おい。起きろ。」

「……ん。…だ、誰だ!？」

ヨーギラスは慌てて飛び起きる。ミニリュウを背中に乗せているのがわかったから、アイソープを回収に来たC R A Z Yかと思ったのだ。

ルシファーは首を横に振り、戦意が無いことを示す。

「今回の救助。フリーデン達が解決したようだ。さて、見ての通りリアルは気絶してる。無理に起こす必要は無い。お前だけに話を話す。悪魔達のな。」

「……!! と言う事か。わかった。話せ。」

悪魔の……（後書き）

今回登場した、ルシファーと言うのも悪魔です。

ルシファーと言う言葉には光を帯びたものと言う意味があります。
ルシファーと言うのは墮天使なんです。

なので羽を黒と白にしてみました。

化け物兵器―バケモノヘイキ―（前書き）

この前の前書きで少しはあらすじを掴んでいただけたでしょうか？

ここからどんどん原作とは違う方に話が傾いてゆく予定です。

更新が未だに不定期ですが……、これからも宜しくお願いします。

化け物兵器―バケモノヘイキ―

「さて、まず何でお前らの事を知ってるかと言うと……、」

「亡者のネットワークだろ？」

ヨーギラスが口を挟んで喋る。

亡者のネットワークと言うのは、全17人いるアイソープ所持者がそれぞれ調べた情報を伝え合う情報網の事をいうのだ。

「その通りだ。次にC R A Z Yだが……。俺ら、つまりアイソープ所持者を追ってる事は知ってるな？ 奴らが本気で俺らを追い始めた事がわかった。既に8人捕まっている。」

「まじか……。G L A YもといC R A Z Yには嫌な思い出があるかならな。」

「レノか？」

静かに、そしてゆっくりとヨーギラスは頷いた。

「レノの事は爺さんから聞かされたさ。2人のサン（弟子）を護り、散った。俺らにとっちゃかなりの英雄さ。」

その話を聞いてヨーギラスは誇らしく思う。レノが英雄だということに。

「そういや、奴らが何故俺らを追うか知ってるか？」

「アイソープだろ？」

ヨーギラスは当たり前のように答える。
しかしルシファアの答えは少し違った。

「YES&NO。正解でもあり不正解でもある。奴らは強大なエネルギーが欲しかった。そこで目を着けたのがアイソープさ。」

「何故力を？」

「世界統合の切り札に。アイソープの力、お前は知らないだろう？
アイソープ。全てのアイソープはこの星を吹き飛ばすぐらいの破壊力を持った兵器（化け物）さ。」

「な！馬鹿な……。」

ヨーギラスはレノからこの話を聞いてはいなかったようだ。反応からして判る。

「何はともあれC R A Z Yはかなり強い。G L A Yとは比べ物にならない。現に8人捕まってる。幾人か新たな人材を投与した所為だろう。」

その事実はさらにヨーギラスの表情を曇らせる事になった。そんな重い事実を知れば自ずと表情を暗くなるだろう。
新しい人材。戦況をひっくり返す程の力を持った存在。

「捕まった奴らは子供や、老いた奴らだ。アイソープの力を完全には引き出していない。だから、捕まった。それをまたしたくは無い。なので、残りのアイソープ所持者にアイソープの力を引き出せるよ

うにして貰う。つまり、力づけの特訓だ。」

「どこでだ？」

この質問からして、ヨーギラスが何を考えているのかが、判るだろう。彼の表情は強い意志と若干の怒りが混じっていた。

「ここから、北東に氷雪の霊峰がある。それより僅かに北にある山がある。その山の中の奥にある場所、悪魔の巣窟だ。」

ヨーギラスは地図を開いた。ゆっくり指を北東に引っ張る。そこにはうっすらとした字で氷雪の霊峰と書かれていた。その後ろに小さな山があった。恐らくそれが悪魔の巣窟なのだろう。

「俺は用事があるのでな、ここでひとまず退散する。お前らは連れて行けないからな。」

「わかった。気をつけてな。」

「了解だ。」

そう短い会話をすると、ルシファーはミニリュウを下ろして、飛び立った。

その姿をヨーギラスは遠い瞳で見つめていた。

化け物兵器ーバケモノヘイキー（後書き）

後書き。

ヨーギラスの好きな食べ物。

赤いポロツク

最近は食べていない。

昔、駄菓子屋のばあちゃんに貰っていらい大好きに……。

ルシファー

「何だ、この後書きは？」

あ、親方！

ルシファー

「誰が親方だ。誰が？」

狙われた悪魔（前書き）

ヨーギラス

「更新は何ヶ月ぶりかな？作者君？」

ふた月位かなあ。

多分。

ヨーギラス

「せーかい！正解者には、地獄への招待券をプレゼント！」

いや。それは、正直、いりませんわ。

ヨーギラス

「せっかく景品をあげるんだよ。もらわないと相手に対して失礼じゃないかな？」

お前に対して失礼もクソもあるか。たつたと、始めるぞ。

更新、遅れて非常に申し訳ありませんでした。

狙われた悪魔

ルシファーに言われた巣窟に行くために、ヨーギラス達は準備を開始した。

まず、広場の商店に向かった。ヨーギラス、ミニリュウの家から商店はそれ程遠くない。

あっという間に広場に着くと商店を目指した。商店に向かう途中、人だかりを見かけたので、見に行く事にした。軽い小走りで人だかりに向かう。

そこでは、フリーディン達が演説のようなものを行っていた。途中からだったが、聞き入る事にした。

「話してきたように、今、我々には圧倒的な力の魔の手が忍び寄りつつある。それは、悪魔だ。彼らは、この広場に潜伏しているのだ。」

そうフリーディンから言われると、周囲にいた者達がざわつく。ヨーギラスは最初、フリーディンが何を喋っていたかは、わからないが、何をこれから喋ろうとしているかが、予想出来た。ヨーギラスはミニリュウに小さな声で何かを言った。

「その悪魔の正体がわかったのだ。それは、この町で二月の間、救助活動を行って来た……、ヨーギラス。そして、ミニリュウだ。」

フリーディンは2人を指差しながら言った。民衆の視線が一気に2人に集まる。民衆はジリジリと攻め寄って来る。冗談だろ？と言いたいのもの、そんな余裕は無さそうだった。

民衆が目くじらを起てて、追いかけて来る。ヨーギラスはミニリュウ

ウの上に乗り、後ろに向かって“火焰放射”を放つ。普段の炎をより少し強い。これがブースター代わりになり、民衆と一気に差を付ける。

「ミニリュウ！このまま家まで戻るぞ！」

ミニリュウは顔を前に向けたまま、頷く。そのため、表情はわからなかったが……。

やっと、家に着く。

敵がいつ襲って来るか、わからない状況。家に着くまでの時間が、とても彼らには永く感じられた。

ふーっと息を吐き捨てる。すると、糸がプツンと切れたかのように、2人は座り込む。

そんな2人に休息は無い。

2人の周りに突如、黒い霧が現れる。その霧はどんどん濃くなり、辺りは霧しか見えなくなる。慌てて、立ち上がるも、すでに遅かった。

「ケケケッ！大変だなあ。カインよおお！」

黒い霧を創り出した本人と思われる者が言う。その者は、霧の所為で良くは見えない。

それだけでは、ない。カイン。その名を知っている時点で、ただ者では無い。CRAZYのメンバーかもしれない。体が本能的に、警戒を示す。

「そう驚くなよ。同じ悪魔なんだからよお。」

狙われた悪魔（後書き）

ヨーギラス

「ななな、なにー！？」

何驚いてるの？

ヨーギラス

「最後に出て来たやつ……、俺の名前知ってたー！？」

今更…？

無価値（前書き）

ヨーギラス

「おっ、今回は早いな。」

まあ、メタルギアソリッド2を買ったからまた、更新が遅れるかもね。

ヨーギラス

「はっはっはっ、地獄への片道切符をやるよ。」

いや、全力で遠慮します。

無価値

「うち。また面倒くせえのが出て来たな。」

ヨーギラスは軽く舌打ちをした。

「そうそう怪訝するなってえ…。お前らがまさか悪魔だとはなああ。軽く驚いたぜ。俺の名は、ベリアル。」

「悪いが、聞いた事が無いな。偽名は？」

「ふん。ここまで、ヒントを与えて置いて、わからねーだと？」

ヨーギラスとベリアルとの会話に、ミニリュウが口を滑り込ませる。

「ヨーギラス。この霧、アイソープの力じゃない。恐らくゴーストタイプのポケモンだよ。この感じからして……。ゲンガーかな？」

ミニリュウの推測にベリアルはヒュウと口笛を吹き、驚きを表す。しかし、その次に出る言葉からして、驚きはあくまでも演技に過ぎない事となる。

「正解だ。」

そう言いつつ、ゲンガーが現れる。ゲンガーがいきなり現れた事を気に咎めず、質問する。

「部下はどうした？あの2人だ。」

「裏切られた。いや、あいつらにとつたら、裏切ったかな？」

その声に何の感情も込められていない。彼は部下の行為など、最初から手のひらの上での出来事でしかない。

「俺が悪魔だって事がバレてからあいつらはフーデインについてる。俺も追われる側だ。」

「つまり、手を組まないか？」

「何？」

ヨーギラスにとってそれは、意外だった。今まで敵として対峙して来た相手がいきなり、協定を結ぼうと言うのだ。そう易々と信じられる筈もない。だが、ミニリュウは……。

「ヨーギラス、良いんじゃないかな？」

「何でだ…!？」

ヨーギラスはミニリュウの口からそのような言葉が出るとは、思っていないかった。だから、彼女にOKの理由を尋ねたくなった。

「ベリアルは右肩の後ろにアイソープの反応があったんだよ。悪魔だってわかった以上、巣窟まで向かう仲間が居た方がリスクが減るじゃん。」

「むう……。そうだな……。よし！ベリアル！その話に乗った。」

ヨーギラスの口からもOKが出されると、彼は妖しく笑いながら、

こう言った。

「ケケケツ！ さあ、奴らがこない間にたつたと出発するぞ！」

そのベリアルの場合で、ヨーギラス達は、巢窟に向かって走り出した。

無価値（後書き）

ヨーギラス

「あんな奴と行動すんのかー。」

頼りになるかもよ。

ヨーギラス

「いや、俺に瞬殺されてんだろ。強いはずがねー。」

悪魔なら、アイソープは持ってる。まあ、彼、使わなかったけどね。

ヨーギラス

「弱すぎて扱えねーんじゃないか？」

知らん。

彼の名は（前書き）

……

ヨーギラス

「……」

……ごめんなさい

彼の名は

ヨーギラス達は、群青の洞窟を抜けた所に居る。追っ手は今の所近くには居ないようだ。

ヨーギラスはオレンの実を一かじりし、ミニリュウに投げた。ミニリュウはオレンの実を一かじりした後、ゲンガーもといベリアルにオレンの実を投げた。

「ふう。ベリアル、一つ訊きたいんだが？」

「ガリッ……何……シャクシャク……だ？」

オレンの実をベリアルを頬張りながら尋ね返す。

「お前と一度闘っただろ？あの時は全力だったのか？」

ベリアルはオレンの実をヨーギラスに投げる。ヨーギラスはそれを一かじりし、またミニリュウに投げた。

「ああ、あれはだな……ケケケッ！全力だ、全力。」

ベリアルは少し言葉を濁しながら全力と答えた。ヨーギラスは疑念を抱いたが、それが悪魔なのだと理解し、追求はしなかった。

「ん……ケケケッ！さあ、行くぞ。追っ手だ。」

ベリアルはアイソープの力を使い、敵の気配を読み取る。ベリアルはアイソープには半径一キロ以内ならば敵の大きさ、数などを正確にサーチ出来る。アイソープにはそれぞれ特有の能力がある。ベリ

アルのアイソープが何のアイソープかわからないが、本物のアイソープを持っているようだ。

「……じゃあ、行くか。」

ゆつくりとヨーギラスは立ち上がった。ヨーギラスは独り勝手に歩き始めた。その後を小さな声で笑いながらベリアルは追った。同じくミニリユウも。

「あちい……（怒）」

ヨーギラスは怒っていた。何故ならば先へ進む為に入ったダンジョンが余りにも暑いダンジョンだったからだ。ヨーギラスは知らないがここは火山なのだ。

「喰らえー！！！」

辺りから湧き出るようにマグカルゴが現れた。

イラついているヨーギラスにとってそれは目の前を飛ぶ蚊でしかない。消し去ろうと思った瞬間。

「！！？」

体がフラついた。横を見ればミニリユウもベリアルもフラついていた。頭が熱でやられてしまったのだろうか。

（こんな時に……！！）

まともに前も見えない。それでも手を見つめ、血が出る程強く握る。

「火炎放射ー！！」

一斉にマグカルゴが火炎放射を放って来る。ヨーギラスは諦めかけた。助かる見込みは少なかった。奴らの攻撃はさほど大した威力では無いだろうが、反撃手段がないから、負けなくとも勝ちようがないからだ。

「煙幕！！」

突如何処からか煙幕が放たれる。霞んでいた視界はこの煙幕によって完全に見えなくなった。

敵からの攻撃かと思ったが、どうやら違うようだ。敵からの追撃がない。

「こっちです！」

突如ヨーギラスは何かに引っ張られる。

そのままずるずると引っ張られ、どこかへ連れていかれた。

「……着きましたよ。」

ヨーギラスは目を開く。視界は普通に景色を映してくれた。辺りにはミニリュウもベリアルもいる。

「助けてくれたのは……君か？ 名前は？」

ヨーギラスは使えるようになった目を向け言った。
そこにいたのはヒノアラシ。名前は、

「ぼ、僕、の名前はフラン……。」

彼はフランと言う名だった。

彼の名は（後書き）

ヨーギラス

「フラン？フランってどこかに出て来た気が……。」

しない。それは君の勘違いだ。

ヨーギラス

「それは嘘だな。作者本当の事を言わない!!！」

バレた!!！てか、ひどっ!!？その認識はひどっ!!？

疑わしい(前書き)

ヨーギラス

「は、はい！」

ベリアル

「き、きもい！」

ミニリュウ

「う、うざい！」

後半全部文句だろう！！

疑わしい

「フラン？　そうか、君はフランと言うのか。」

ヨーギラスは鋭い目を二つともフランに向けて行った。ヨーギラスは脅す気などさらさらなかったのだが、その目の所為で結果彼を脅かす結果となってしまうた。

「え、えと、そ、うです……。親戚に子供が産まれたから遊びに……」

目が潤んでいる。今にも泣きそうだ。

「落ち着いて落ち着いて♪」

ミニリュウがフランを宥める。フランの目が少しずつ笑ってくる。その様子を見てヨーギラスは、「フン！」と言った。そんなヨーギラスを見てベリアルは笑っていた。

「産まれた親戚の子は何て名前？」

「えっと、は、疾風^{はやて}って名前。」

フランはミニリュウにどんどん話をした。

歳は12歳。男。この四つ連なる火山の内の一つは疾風と言う子の家らしい。さらには火山の抜け道まで教えてくれた。

その道を通れば火山頂上まではぼ誰にも見つからずに通れるらしい。

「ありがとうね♪フラン。また今度ね♪」

ミニリュウはフランに手を振ると歩き出した。ヨーギラス、ベリアルはミニリュウの後を追った。

「ケケケッ。どうやらお前は餓鬼に好まれないらしいな。ケケケッ。」

「うるせえ。お前だって好まれないだろ。」

ベリアルはまたケケケッ、と笑うとさあ？、とヨーギラスは右目で見ながら言った。

フランが教えてくれた道は火山にも関わらず暑くはなかった。

「なあ、ヨーギラス。お前に教えておくぜ。俺のアイソープについてよ。ケケケッ。」

山道を歩く中ベリアルが急にそんな事を言い出した。ヨーギラスはそれを黙って訊いていた。ヨーギラスは黙っていたが、信用する気はあまりなかった。

「俺のアイソープは右の肩甲骨辺りにある。タイプは飛行タイプだ。能力としては知ってるだろうが、探知能力だ。」

信用する気などなかったヨーギラスだが、これには信用さぜるを得なかった。何故なら何一つ間違った事を言っていない。だからこそ疑わしかった。嘘の塊のようなベリアルが本当の事を言ったから。

「何故本当の事を話した？」

だから気になったのだ。ヨーギラスは。ベリアルの真意が。

「ケケケツ。まあ、必要になった時のためさ。」

ベリアルがそう言った直後、ヨーギラス達は火山頂上にたどり着いていた。

疑わしい（後書き）

ケンの物語新章の執筆もある程度は出来てきました。

では、

ヨーギラス

「みじかつ!?!? てか、俺らの小説について書けよ!?!」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7493j/>

ヨー!!ギ、ラス!!

2011年10月6日09時46分発行